

## ルカによる福音書7章「偉大な預言者」

### 1A 神の訪れ 1-17

1B 百人隊長のしもべ 1-10

2B ナインの寡 11-17

### 2A 道備え 18-35

1B ヨハネの迷い 18-23

2B 御心を拒む者たち 24-35

### 3A 罪赦しと愛 36-50

1B シモンの家に入る不道德な女 36-39

2B 多く赦された者の愛 40-50

## 本文

ルカによる福音書 7 章を開いてください。私たちは前回、イエス様が平地で説教を行われたところを読みました。そこでイエス様が強調されたのは、主を第一とする関係であり、自分自身を岩なるキリストの上に建て上げることです。その語られた言葉を、主が語られたからということで行うことでした。そして 7 章に入ります。再びイエス様の偉大な業が行われます。その時に、意外な人々がその恵みにあずかっていきます。

### 1A 神の訪れ 1-17

1B 百人隊長のしもべ 1-10

1 イエスは、耳を傾けている人々にこれらのことばをすべて話し終えると、カペナウムに入られた。

イエス様が平地にて説教をされてカペナウムに入られましたが、ということは、この平地はカペナウムからそれほど遠くないところにあったのでしょう。

2 時に、ある百人隊長に重んじられていた一人のしもべが、病気で死にかけていた。3 百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださーいとお願ひした。4 イエスのもとに来たその人たちは、熱心にお願ひして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。5 私たちの国民を愛し、私たちのために自ら会堂を建ててくれました。」

カペナウムは、エジプトからメソポタミアにまで続く海沿いの道、ヴィア・マリスが通っているところ。通行税の徴税のためにマタイがそこで取税人であったのですが、ここではローマ兵の駐屯地でもあったことを伺わせます。ヘロデ・アンティパスが作っていました。それで百人隊長が出て来ます。彼はもちろん異邦人ですが、ルカが平地での説教の後に、初めに伝えているのが異邦人

である百人隊長に主イエスが行われたことでした。けれども、百人隊長は、他の箇所でもとても大事なところで登場します。十字架におけるイエス様の死を目撃して、「この方は正しい人であった」と言ったのは百人隊長です。そして、主が異邦人への宣教の啓示をはっきりと与えられたのは、ペテロに対してであり、カイサリアのコルネリウスを通してでした。神が、イスラエルのためだけにキリストを遣わされたのではなく、異邦人の救いのためにも遣わしていることがよく分かります。

この百人隊長は、ユニークな人でした。実はコルネリウスもそうでしたが、イスラエルの神を敬っていた人です。ローマ人でありながら、それでも自分たちには数多くの神々がいるけれども、天地を造られたまことの神をあがめていたのです。改宗はしていませんが、敬っていたのです。そして、彼はユダヤ人の会堂のために自分の資金を出していました。そこで長老たちが、百人隊長のしもべが死にかけた病にかかっているのを直してほしいと願い出ます。ここで長老たちが、「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です」と言っているのに注目してください。次に出て来ますが、彼本人はそれを否定して、資格がないとしているのです。

6 そこで、イエスは彼らと一緒に行かれた。ところが、百人隊長の家からあまり遠くないところまで来たとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスにこう伝えた。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。

百人隊長は、よく知っていました。自分自身は異邦人であり、イスラエルのメシアとして来られた方が自分のところに来るとい資格はないのだということです。覚えていますか、ツロのほうにイエス様の一行が行った時に、カナン人の女がいました。彼女は娘を助けてくださるよう、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。」と叫びます。けれどもイエス様は、「マタ 15:24 わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」と言われました。ユダヤ人の神を敬っているがゆえに、百人隊長はへりくだって、自分には資格がないと言ったのです。けれども、それは救われないという意味ではありません。

7 ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。8 と申しますのは、私も権威の下に置かれている者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。9 イエスはこれを聞いて驚き、振り向いて、ついて来ていた群衆に言われた。「あなたがたに言いますが、わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」10 使いに送られた人たちが家に戻ると、そのしもべは良くなっていた。

百人隊長だからこそ、知っていたのが「言葉にある力と権威」でした。私たちは権利や選択というのは当たり前だと考えますから、なかなか、「主よ、主よ」と呼んでも、主の言われることを行わな

いという傾向があります。けれども、百人隊長はその言葉にある力を知っていました。自分自身が権威系統の中にいたからです。千人隊長が自分の上にいます。彼から命じられたことは絶対であり、また自分が部下に命じることも絶対命令です。そうでなければ、部隊として敵に戦うことはできません。

そしてイエス様が驚かれています。「わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません。」と言われていました。その反対にナザレにおいて、イエス様は彼らの不信仰に驚かれています(マルコ 6:6)。ユダヤ人で最も身近にいた人たちが不信仰に陥り、ユダヤ人から離れている異邦人が信仰に満ちているというのは、逆説的ですね。

百人隊長は、信仰の本質を知っていました。「ロマ 10:17 ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。」キリストの言葉を聞いて、それを信じるからこそ、救われます。神が私たちを救うという力は、福音を信じる信仰によるのです。ですから、目に見えなくとも、全く状況が異なるように見えても、それでも私は、この方のお言葉に信頼するとして、信じるのです。そして、この信仰こそが異邦人であっても、神によって救いを受け取る媒体になります。ペテロが、コルネリウスとその家族が救われたのを目撃した時に、彼らが信仰によって清められたのだということに気づきました。「使 15:9 私たちと彼らとの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。」ですから、私たちがどんな素性であっても、どんな過去を持っていても、努力をしてきたかどうかとか、そういうのは全く関係なく、主の言葉を信じて聞いて、受け入れるところに清めがあります。

## 2B ナインの寡 11-17

11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。

ナインという町は、カペナウムから南東に 30<sup>キロ</sup>の町です。イズレエル平野の中であり、モレ山の北の麓にあります。かつてギデオンと三百人の勇士が、南側にあるハロデの泉からこの山を越えてミディアン人を襲いました。その山の南にシュネムがあります。あのシュネムの女の話はそこで起こりました。興味深いのは、シュネムの女も死んだ男の子をエリシャに生かしてもらいました。ですから、モレ山には復活の奇蹟がその南側と北側でどちらでも起こったことになります。

12 イエスが町の門に近づかれると、見よ、ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出される場所であった。その母親はやもめで、その町の人々が、彼女に付き添っていた。13 主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。14 そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言われた。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。

町の門とありますが、この町に城壁があったのでしょうか。その城壁の外にある墓地に埋葬しよう

としていました。そこから出てきたのが、寡です。寡になるということは乞食になるのと同じぐらい生活に困窮する状況であります。だから、モーセの律法にはやもめの世話をしようとの命令があり、新約聖書でもパウロが、本当のやもめを養うようとの指導をしています。そこで、かけがえのない一人息子が死んでしまいました。今現代でも、ただ一人の息子が死んだらどん底に落ちてしまいそうな思いになるでしょうが、自分を扶養する人がいなくなったということで、その絶望は今現代以上です。

イエス様は、「深くあわれみ」とあります。これは福音書によく出て来る言葉で、「腸(はらわた)」という言葉から来ている動詞です。つまり、「同情の腸を持たれ」という意味合いがあります。イエス様は、私たちをこのように深く憐れまれます。そして驚くことは、「近寄って棺に触れられる」ということです。以前に、らい病人をイエス様が触れられたところを読みましたが、同じような意味合いがあります。律法に拠れば、死体に触れると汚れます。当時は、棺というのは箱ではなく板状になっていました。その遺体に触れたのでしょうか。けれども、イエス様に汚れが移るのではなく、イエス様の聖さが逆に映るのです。

そして、主は言葉をかけられました。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」そうです、主の言葉には権威があり、力がありましたね。そして若者は起き上がって、物を言い始めたのです。ここに、イエス様に復活の力があることが証明されています。死んだ人を生かす力が証明されたのです。主はご自身が後によみがえられ、そしてご自身が戻られる時、声をかけられます。その時に全ての人々が甦るのです。「ヨハ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

16 人々はみな恐れを抱き、「偉大な預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がご自分の民を顧みてくださった」と言って、神をあがめた。17 イエスについてのこの話は、ユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まった。

彼らは驚きを越えて、恐れを抱くほどでした。そして、「偉大な預言者」と言っています。これは、エリヤやエリシャのような預言者です。モーセのような預言者かもしれません。モーセがエジプトに戻った時に、「出エ 4:31 民は信じた。彼らは、主がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったと聞き、ひざまずいて礼拝した。」とあります。それぐらいの大きな衝撃です、神が自分たちの時代に訪れたという衝撃です。それでユダヤ全土と周辺の地域一帯に広まりました。

## 2A 道備え 18-35

こうやって、主の偉大な御業の噂が広まってきました。ルカが書き記した特徴的なことは、初めに異邦人である百人隊長、次に、ホームレスになりかけぐらいの、息子を失った母親です。主が、そのようなユダヤ社会の周辺にいるような人々に働きかけておられたのですが、その噂が、バブ

テスマのヨハネの耳に入ります。

### 1B ヨハネの迷い 18-23

18 さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。すると、ヨハネは弟子たちの中から二人の者を呼んで、19 こう言づけて、主のもとに送り出した。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか。」20 その人たちはみもとに来て言った。「私たちはバプテスマのヨハネから遣わされて、ここに参りました。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、ほかの方を待つべきでしょうか』と、ヨハネが申しております。」

ヨハネは今、牢に入れられています。彼は、ヘロデ・アグリッパの悪事を責めたので、彼によって牢に入れられていました(3:20)。ヘロデ・アグリッパの要塞宮殿である、マカエラスがその場所です。当時のペレア、今のヨルダン、死海の東側にあります。あれほど力強く主が来られるのを待っていたヨハネが、どうして迷いや疑いが出てきたのでしょうか？しかも、これほどまでの偉大な業が行われていたのにも関わらず、です。

それは、彼が期待していたほどのものではなかったからではないか？と思われまます。一つに、異邦人が癒されたであるとか、寡の息子が生き返ったであるとか、ユダヤ人である彼の目にも周辺的なものであったのかもしれませんが。私たちも、中心的ではなく周辺的なことだということでしょう。ヨハネとて、そういった神の新しい働きに付いていけなかったのかもしれませんが。私たちはなおさらのことでしょう、主が新しいことを始めておられるのに、それに付いていけないということです。

そして何よりも、彼が示されて説教をしていたその内容に従えば、もう主が裁きを行わなければならなかったのです。「3:7 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。」とありました。ヨハネは、エリヤの霊と力で主の訪れの前触れをしていて、それで、マラキ書の最後には、「4:5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」とあるからです。それでも一向にその恐るべき日が来ているように見えないのです。

21 ちょうどそのころ、イエスは病気や痛みや悪霊に悩む多くの人たちを癒やし、また目の見えない多くの人たちを見るようにしておられた。22 イエスは彼らにこう答えられた。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。23 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

イエス様のこれらの働きは、イザヤ書などに、神の訪れ、またメシアが来られた時に行われることとして預言されているものです。イザヤ書 61 章は、すでにイエス様がナザレの会堂で朗読され



たところですが、そこに貧しい者に良い知らせをし、人々を解放する働きが書かれていました。そして、35 章 5-6 節には、こうあるのです。「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。…」主は、このような恵みの時に行われること、復讐の日が来る前に行われることを行われていたのです。

私たちがヨハネの経験するような葛藤を抱くことがあります。主が来臨の約束を与えてくださいました。希望と将来を与える計画を与えてくださっています。ところが、なかなかそのように兆しが見えないと感じます。それでがっかりすることがあります。けれども、あきらめないで信じます、熱心に祈り、待ち望みます。実は、その間に主が、人々が悔い改めることができるように待ってくださっている時なのかもしれないのです。私たちの時間間隔だと、神がすべてを正してくださるのが遅すぎると思うかもしれませんが、主はその間に、人々に憐れみを示して悔い改めて、滅びから免れる時として使っておられるかもしれないのです。「Ⅱペテ3:9 主は、ある人たちが遅れているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」

そして、「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」とされていますが、つまづかないでほしいですね。

## 2B 御心を拒む者たち 24-35

24 ヨハネの使いが帰ってから、イエスはヨハネについて群衆に話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。25 では、何を見に行ったのですか。柔らかな衣をまとった人ですか。ご覧なさい。きらびやかな服を着て、ぜいたくに暮らしている人たちがなら宮殿にいます。26 では、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。わたしはあなたがたに言います。預言者よりもすぐれた者をです。27 この人こそ、『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。28 わたしはあなたがたに言います。女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

イエス様は、ヨハネについて語り始められました。ここは、旧約と新約のつながりを知るのにとっても大切な箇所です。まず、注目してほしいことをはっきりさせるために、あえて疑問形にして尋ねておられます。ヨハネは、もちろん風に揺れる葦ではありません。彼は、そのような人のご機嫌取りのような揺れる人ではなく、まっすぐに真理を語りました。そして、ぜいたくに暮らしている人でもありません。荒野で暮らして、いなごと野蜜の生活をしていました。

そして預言者であるということですが、彼は旧約時代の最後の預言者と言えます。しかし、他の預言者よりもさらに偉大です。他の預言者たちは、主が来られることを語りましたが、ヨハネは既

に主が来られたことを語ったからです。人々がキリストを王として受け入れることができるように、悔い改めを説いたのです。そういった意味で他の預言者よりもすぐれているし、そしてイエス様は、女で生まれてきた者の中で、ヨハネより偉大な者はいないとまで言っています。それは、ヨハネが優れているからではなく、ヨハネが伝えていた方が優れているからです。

しかし、もっと優れているのは、キリストにある神の国の中に入ることそのものであります。それがいかに栄光に輝いているところか、どんなに小さな者でもヨハネよりも偉大であるということです。私たちは、聖書の中の人物が神ご自身に会っている姿を見て、それはすごいと思うかもしれませんが、実は私たちのほうが、はるかにすごいと彼らは逆に思っているのです（I ペテ 1:10-12）。

29 ヨハネの教えを聞いた民はみな、取税人たちでさえ彼からバプテスマを受けて、神が正しいことを認めました。30 ところが、パリサイ人たちや律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けず、自分たちに対する神のみこころを拒みました。

主は、小さき者、貧しい者に福音を伝えるのを喜びとされましたが、高ぶる者にはその喜びを隠されていました。パリサイ人や律法の専門家は、その知識や実践があったばかりに、かえってそれが肉の誇りとなって、恵みによる救いの喜びを味わうことができなかつたのです。

31 それでは、この時代の人々を何にたとえたらよいでしょうか。彼らは何に似ているでしょうか。32 広場に座り、互いに呼びかけながら、こう言っている子どもたちに似ています。『笛を吹いてあげたのに、君たちは踊らなかつた。弔いの歌を歌ってあげたのに、泣かなかつた。』33 バプテスマのヨハネが来て、パンも食わず、ぶどう酒も飲まずにいと、あなたがたは『あれは悪霊につかわれている』と言い、34 人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『見ろ、大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言います。

イエス様は、とても分かり易く彼らの頑なさを嘆かれております。子供が遊んでいる掛け合いの言葉を使われて印ですね。笛を吹くのは、結婚式ごっこです。弔いの歌は葬式ごっこです。どちらをやっても、反応しないことを歌っています。面倒くさい子たちですが、実に彼らがそうになっていたということです。こーいやあーいい、あー云やこう言っています。それは、結局はヨハネの語る言葉も、イエス様の言葉も受け入れたくないからなのです。

ヨハネは、断食もし、それからナジル人としてぶどう酒も飲まずにいました。すると、悪霊につかわれていると言ったのです。まともな日常生活を歩めないやつ、それで悪霊につかわれていると言っているのですが、これは酷い言葉であり、なぜなら、悪霊につかれた預言者など、申命記 13 章では死罪にならなければいけないからです。そしてイエス様は、人々を食事をするのを好まれました。王なる方が客と食事をする、そうやって御国の中のお祝いを前もって知らせていたのですが、それ

を「食いしん坊の大酒飲み」と酷評しました。また取税人たちと共にいるのだと言いましたが、これもまた放蕩の息子が石打ちにされる例が申命記 21 章 20 節にあって、死罪に値するのです。こういった酷い言葉を、平気で言っていました。私たちも、誰かに対して軽々しく罪に定めるような言葉を語ってはいけません。神を畏れる必要があります。

35 しかし、知恵が正しいことは、すべての知恵の子らが証明します。」

ここは次の話につながる、大事な言葉です。だれに知恵があるのか？ということですが、それはその知恵に触れて、従っている人々の中に証しとして残るということです。知恵というのは、主ご自身とその教えを示してます。パリサイ人があれこれ、イエス様のことをそしるのですが、信じている人々の生活に知恵があることが証明されるよ、ということです。

### **3A 罪赦しと愛 36-50**

#### **1B シモンの家に入る不道德な女 36-39**

36 さて、あるパリサイ人が一緒に食事をしたいとイエスを招いたので、イエスはそのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。

彼の名はシモンです。彼と一緒に食事をしたいと招いていますが、ユダヤ教のラビを自分の家に招いて、それで律法のことについて語り合ったりするというのはよく行われていました。そして、当時の家は、中庭があってその周囲に家々が隣接していました。それで、人々が中庭からそれぞれの家の中で話されている言葉も、聞くことができるようにしていました。そうやってラビたちの話に耳を傾けることができるようにしていたのです。

37 すると見よ。その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持って来た。38 そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った。39 イエスを招いたパリサイ人はこれを見て、「この人がもし預言者だったら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っているはずだ。この女は罪深いのだから」と心の中で思っていた。

「すると見よ。」という言葉からルカは始めました。これは、注目に値する出来事でした。「その町に一人の罪深い女がいて」と言っていますが、不道德な女を指しています。町で知られた不道德な女だったのです。そして彼女はユダヤ人です。普通の時は、彼女が近づこうものなら必ず戸口を閉めて、入らせないようにしていますが、今は、人々にも聞けるように開かれていましたから、扉を開けていたのです。

しかし、彼女の取った行動が特別なものでした。石膏であります、アラバスターのものでした。香油を入れるのに適していました。そして、彼女がイエス様の足元に近寄っています。当時は、横



たわって、低い食卓に取り囲んでいたのですが、それで足に近づけました。そして泣いていますが、声を挙げて泣いている姿になっています。そして髪の毛で涙をぬぐっていますが、普通、ユダヤ人の婦人は被り物をしていたので、公の場で髪の毛を見せているということからも、不道德な女だからできたのだと思います。そして口づけしています、これは何度も行っている姿が見えていきます。そして口づけしていますが、足に口づけするのは、はしための姿です。香油を足に塗っています。普通、頭に香油を塗るのですが、足に塗ったのは、これもまた低姿勢を示しています。

ところが、シモンはかなり驚いて、彼女が罪深い女なのに、預言者だったら誰だか知っているのだから、そんなことをさせないはずなのに、と心の中で思っていたのです。しかし、イエス様は驚くべきことをこれから語られます。これまで、ことばだけで病を治され、死人を甦らせるなど、その言葉の権威と力は偉大なものでしたが、次の恵みの言葉は、もっと驚くべきことでした。

## 2B 多く赦された者の愛 40-50

40 するとイエスは彼に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生、お話しください」と言った。41 「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリ。42 彼らは返すことができなかったので、金貸しは二人とも借金を帳消しにしてやった。それでは、二人のうちのどちらが、金貸しをより多く愛するようになるでしょうか。」43 シモンが「より多くを帳消しにもらったほうだと思います」と答えると、イエスは「あなたの判断は正しい」と言われた。

イエス様は、たとえ話を語られ、それから質問されます。とても分かり易い喩えですね、イエス様の教え方は、誰にでも分かるような喩えでした。そして質問に答えさせていますが、とても答えやすく、誰でもわかるものです。だからこそ、シモンは自分のしていることで恥じるようになります。

44 それから彼女の方を向き、シモンに言われた。「この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。45 あなたは口づけしてくれなかったが、彼女は、わたしが来たときから、わたしの足に口づけしてやめませんでした。46 あなたはわたしの頭にオリーブ油を塗ってくれなかったが、彼女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。47 ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」

午前礼拝で説明しましたが、シモンがイエス様を客として招いていますが、これは基本的な客へのもてなしをしていない、とても失礼なものでした。しかし、女はそれらのすべてを、彼女の方法でいつの間にか行っていたのです。

ここの、「ですから、わたしはあなたに言います。この人は多くの罪を赦されています。彼女は多

く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」という言葉が大事です。彼女がイエス様に良い行いをした原動力は、イエス様への愛でした。そしてその愛は、罪が赦されているということから来ていたものでした。イエス様が捕らわれ人には赦免を宣言しておられましたし、中風の人にも罪が赦されたと言明しておられましたし、取税人や遊女との食事に招かれて食事をしておられましたし、彼女はそうしたイエス様を見て、とてつもない罪の自覚が与えられ、それから罪の赦しの確信が与えられたのだと思います。だからこそ、熱く愛しました。

その反面、少ししか赦されていないから、少ししか愛していなかったのがシモンです。行いを求めれば、必ずポロが出ます。なぜなら、心が変わっていないからです。心が変わっていないのは、神の恵み、そして無条件の愛に触れられていないからです。

私たちは、どうしても表面的な行いの部分だけを見てしまいがちです。パリサイ派のような、人がすぐ見て認めることができるような義を求めがちです。けれども、良い行いというのは、自分がそれを意識して行なうよりも、もっと自然に出て来るものです。愛によって押し出されるものです。ですから、私たちがキリスト者として、どんな些細なことでも、この女のようにイエス様に愛されている、イエス様に受け入れられている、自分の罪が赦されているという安心感と確信、感動があるかどうかで、その些細なこと、小さなことができるようになります。

48 そして彼女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。49 すると、ともに食卓に着いていた人たちは、自分たちの間で言い始めた。「罪を赦すことさえするこの人は、いったいだれなのか。」50 イエスは彼女に言われた。「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

ここで、イエス様が罪が赦されましたと言われたのは、あの中風の人に対して言われたのと同じで、これは神にしかできないことです。つまりイエス様は、預言者でありながら、預言者以上のことを行われたということです。それで、ここにいた人々の間で言い合いが始まりました。この人はいったい誰なのか？と。そう、論理的結論はキリストご自身なのです。

けれども、イエス様はそういった言い合いには入らずに、彼女に霊的な励ましを与えられます。「あなたの信仰があなたを救ったのです。」そう、ここでの信仰なのです。しもべの病が癒されるのも、そして罪が赦されるのも、この方を信じるというところから来ています。みなさんは、自分の罪が赦されたことを信じていますか？信じているならば、救われているのです。神のかたちへと救われています。罪から来る神の怒りからも救われています。安心してすることができます。とこしえまで、父なる神のみもとに在ることができるのです。決して神の愛から引き離されることはありません。